

愛

佐

坊主の
花かんざし

子

藤

愛

佐

坊主の
花かんざし

子

藤

読売新聞社

坊主の花かんざし

九八〇円

著者——佐藤愛子

編集人——笠井晴信

発行人——深見和夫

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一
大阪市北区野崎町八の十一
北九州市小倉北区明和町一の十一

〒一〇〇
〒五三〇
〒八〇二

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——ナシヨナル製本

第一刷——昭和五十年四月十日

第十刷——昭和五十三年七月十日

装丁者——和田誠

© 佐藤愛子 昭和五十年
落丁本・乱丁本はお取り替えます。

0095—701710—8715

Printed in Japan

日本音楽著作権協会(出)許諾 第 7802468 号

坊主の花かんざし
目次

7	——	五十歳の自尊心
12	——	恥かしきもの
18	——	根性の人
24	——	男を見る目
29	——	ああ女！
34	——	アッチのこと
40	——	悪運
46	——	色じかけ
51	——	女郎屋考
57	——	続女郎屋考
62	——	近所迷惑
68	——	女の浮気
74	——	豚は天国へ行く
79	——	たしなみ
85	——	先生考
91	——	男らしさ

184	179	173	167	162	157	151	145	139	133	127	121	115	110	104	97
道づれなし	勿体ない	女の戦い	やめてんか?	怒るわけ	看板の下のネズミ	居候	殴る	馬に学ぶ	ヤキモチの必要	女の怒り	らしい	男と女の間	呆然	人間的	離婚の鑑

277	271	265	259	254	248	242	236	230	224	218	212	206	200	195	190
下賤の出	怖い	カマトト考	もの書きの友達	この頃の年寄り	教訓	瘦我慢	荅考	胆勇の人	いたずら考	妻心	死んだフリ	ノゾキ考	秋風の女	悪者の顔	飼い主の資格

坊主の花かんざし

五十歳の自尊心

一九七三年は私にとってあまり愉快な年ではなかった。私はこの年に満五十歳となり、体力、頭脳の衰えを切実に感じるようになった。まず、正月四日に風呂場ですべって転んで肋骨にヒビが入り、二月三月は執拗な咳に悩まされ、六月原因不明の発熱、七月より腰痛がはじまって子宮癌の疑い、腰痛は夏から秋までつづき、十一月は旅先で胃ケイレン、引きつづき風邪をひいて年の暮まで回復せずという有さまである。

体力が弱って来ると気力も衰える気力が増えるのかかるのは中学二年の一人娘のことである。

この子はふだんはおとなしいのだが、一本気ですぐにのぼせ上る。のぼせ上ったが最後、対象以外のものはすべて見えず聞こえずという状態に陥る。この子はきつと男に欺されるにちがいない。私は殆どそう確信しているのである。

それでも母親の私が生きている間は、男は母親こわさに近づいては来ぬであろう。こっちから来てくれというても来んのはありませんかなどという人もいるくらいで、私は娘を守るであろうが、私

が死んでしまった暁はどうなるか心配である。

そこで私は旧友遠藤周作に私の死後のことを頼んだ。

「ねえ、遠藤さん、うちの娘をお宅のムスコさんの嫁さんにしてもらえんやろか？」

遠藤周作の一人息子、龍之介くんは確か高校二年である。

一度、羽田飛行場で紹介されたことがあるが、父親に似ぬなかなかの美少年であった。

何よりも私は遠藤夫人を尊敬しているので、舅しゅうとの方は少々悪くともあのようなお姑さんのそばにいられるなら娘も少しはマシな女となってくれるであろうと思ったのである、すると遠藤周作はいった。

「持参金なんぼや？」

「持参金——」

とおうむ返しにいったきり私は絶句した。

「借金はもうないやろな。持参金によっては貰もらてやらんこともない」

「持参金を持たせてやるのが出来るくらいなら、なにもあんたに頼みませんよ！　もっとエエところを探す！」

と私は怒った。

「あんた、遠藤さん、そんな生意気なことをいうてもええのですか。あんたは昔、そばへ近づくとプンと臭い匂においがあるのでソバプンと呼ばれていた劣等生じゆうとうせいではないの。我ら甲南高女の生徒は灘中ごと

きはハナも引っかけなんだ。あんたは甲南の生徒の注意を惹こうとして電車の中で吊皮にぶら下って首ツリの真似をしたり、お猿のような奇声を上げたりして、それでも見向きもされんハキダメのカボチャのヘタではなかったですか。それをやね。今になって偉そうに、持参金はなんぼやとは……」

「わかった、わかりました。安心せえ。あんたの娘はオレが引き受けた……」

遠藤周作は素直に謝り、

「ところで君の娘はベッピンかね」

「そうやねえ。ベッピンというほどではない。十人ナミというところね。母親よりは半分落ちますね」

「うーん、そうか。気だてはどうやね？ 母親似か？」

「いや、どちらかといえば父親似ですね」

「つまり気は強うないということですか？」

「まあそうです」

「それなら安心」

と話は落着した。勿論、親同士の間である。

それ以来、遠藤周作は急に威張るようになった。退屈すると電話をかけて来て私の仕事の邪魔をする。私が怒るところいう。

「そう怒るな。オレはあんたの娘の未来の舅やぞ！　今から二十年後のことを考えてみい。俺、遠藤周作は豪壮なる邸宅の大理石のマントルピースの前で、揺り椅子をゆすりつつパイプをふかしておる。そうしていう。……『おい、響子、ちょっと来なさい』『ハイ、お父さま、何かご用でしうか』と君の娘がやって来るんや。『この頃、里のお母さんはどうしておられるかな？』『ハイ、母は……』と君の娘はいいさしてうつむく。『なに？　お母さんは養老院へ行っておられるのか。そして養老院の嫌われ者になっておると？　それはいかん。それはあまりにお気の毒だ。早速、養老院からこの屋敷へ来ていただきなさい。うちの台所横の三畳が空いておるだらう。あそこに来てもらいなさい』『ハイ、ありがとうございます。けれど、母は何しろ名うての我儘者、気の強いことではどの養老院でも知らぬ人となない有さま。お父さまのお優しいお心はありがたく存じますけれど、あの母のことですからきつとご迷惑をおかけすると思います……』『なに、そんなことはかまわん。かまわん。君の毒な人を助けるのは富める者の義務だ。遠慮はいらん、連れていらっしゃい』……するとだな、君は白髪まじりのボウボウ頭、羅生門で渡辺綱に片腕斬られた鬼婆がいるやろ、つまりあのような老婆となりたる佐藤愛子はやな……」

「何をいうか。黙っていればいい気になって！」

と私は怒り心頭に発して大声にわめき、この縁談を打ち壊します！　と宣言したのである。

それでまたしても私は、私の死後の娘のことを心配しなくてはならなくなった。

そんな折しも神戸の薬局の主人公から電話がかかって来た。その薬屋さんは私の有難い愛読者で、ときどき私のことを心配して神戸から電話を下さるのである。

「この頃、お身体の方、どうですか？」

と薬屋さんはいった。

「わたし、先生の健康について色々と考えてみたんですけど、つまり、その、何です。

この頃、先生の健康がすぐれはらんのは、ずーっとおひとりやさかい、その、ナニが足らんせいやないかと思えますわ。わたしの店へ来るお客さんの中にもそういう人がいてはります。よう話を聞いてみたら、ナニの方がどうも足らんのですなあ」

薬屋さんの心配は有難いが、ナニが足らんのを足りるようにするというのは、簡単なようで難かしいことなのである。

「ほんまに気の毒になア」

と薬屋さんは誠実そのものといった溜息ためいきをついた。

「わたしがもう十歳、若かったらなァ……」

薬屋さんは今、何歳なのか私は知らない。しかし、ご心配は有難いが、ナニが足らんとそう勝手に決められると、私の自尊心は傷つくのである。

恥かしきもの

フォークダンスというものがある。

「健全」と「和氣アイアイ」をまぜ合せましたというダンスで、これを見ると私は何ともいえぬ恥かしさに襲われるのが常である。何が恥かしいかといえばまず第一に「和氣アイアイ」が恥かしいのである。

和氣アイアイとはいったいなんであるか。

数人の人間が集って手を取り合い、輪を作り、音楽に合わせてグルグルまわり、腕の下をくぐったり、チョンと地面を足で蹴^けってみたり、肩をくんで小首をかたむけ顔を見合わせる――

それが和氣アイアイというやつなのだ。満足している。その満足が私には恥かしくてたまらぬ。だいたい、「和氣アイアイ」という雰囲気^{ふんいき}は私には恥かしいのだ。

男女共学になって以来、中学生の男と女がフォークダンスをおどる。中学生が女学生と肩を組んでスキップして、チョンと顔見合せたりして。だいたいこんなものを男の学生にやらせるから日本は

ダメになるのだ。

また、運動会だというと必ず「お母さんがたのフォークダンス」というやつが登場する。ええ年したお婆さんが新しい運動靴はいて腕とりあってまじめくさっておもむろに出て来る。この「まじめくさっておもむろに」というところが私には恥かしくてたまらないのだ。恥かしいが、じっとがまんして見ると、そこはかとなき人間の愛しさ、悲しさがジクジクと胸に湧いてくる。そしてそれゆえ、また恥かしさが深まるのである。

ところで三日前から、私は腎盂炎^{じんぶえん}という病気で四十度の熱を出して伏っている。従ってこの原稿も寢床の中で書いているのだが、腎盂炎はこれで三度目の発病である。見舞に來た私の友人は、

「恥かしい人ねえ、そんな病気になるなんて」

といった。なぜ恥かしいかといえば、腎盂炎とは腎臓に大腸菌が入って高熱を出す病気だからだという。つまりこれはシモの病気だというのだ。大腸菌は「アソコから入るんやもの」と友達はいった。

「それがなぜ恥かしい」と私は怒った。

女はそういう構造のアソコを持っておる。男の構造は突出しておるから大腸菌は入りにくい。これ公明正大、自然の理である。それがなぜ恥かしい。それを恥かしいというなら、突出しているのになぜかやたらに大腸菌が入って腎盂炎になる男性の方が恥かしいではないか。

昔の娘にとつては「嫁に行く」ということは恥かしいものと決っていた。

「ハナちゃん、来月、お嫁入りだって」といわれて、

「知らない……いやなひと……知らないったら知らない！」

と真赤になった顔を袂で隠し、パタパタとお尻ふって逃げて行く。

結婚とは元来、めでたいことであるのに、なぜ恥かしいのか。ある人にいわせるとそれはつまり、嫁に行くということは男さんとナニをするという連想が本人にあるからだというが、誰もそんなことをいってやしないのだ。ただ来月お嫁入りだってな、といっただけのにひとりで、知らない……いやなひと……とさわいで恥かしがっている。私にいわせるとその方がよほど恥かしいね。それにつけても思い出されるのは次の歌である。

あなたのリードで島田もゆれる

チークダンスのなやましき

乱れる裾も恥かしうれし

芸者ワルツは思いでワルツ

なにが、あなたのリードで島田もゆれるだ。なにが、乱れる裾も恥かしうれしだ。こういうのをカ

（「芸者ワルツ」西条八十作詞 ©全音音楽譜出版社）